

第2章 学習意欲を高める授業運営

1. 学習意欲とは

(1) 意欲の特徴

多くの教員は学生が意欲的に学んでくれることを望んでいます。しかしながら、同時に、学生の学習意欲を引き出すことがむずかしいこともよくわかっています。どうすれば学生の学習意欲を高めることができるのでしょうか。それを考えるにあたり、まず学習意欲の特徴を押さえておきましょう。

①理解と意欲の関係

大学に入ったら心理学を学びたいと思っていたAさん。意欲満々でさっそく心理学を受講しました。初回、とてもわかりやすい講義で、よく理解できました。次回も楽しみにになりました。2回目。今回もとてもよく理解でき、ますます心理学の学習に意欲が高まりました。ところが第3回、理論的な話になり、急にむずかしくなりました。抽象的で理解しにくく、結局半分以上わからない内容でした。意欲が低下し、次回の授業を欠席してしまいました。

意欲は理解と密接な関係があります。学習内容をよく理解できると意欲と高まりますが、あまりよく理解できないと意欲が低下します。

②意欲の継続困難性

とても真面目なBさん。授業の最初はいつも意欲的です。先生の話をしっかり聞き、重要なポイントを中心にノートをとっています。しかし、時間とともに眠気が襲ってきます。いくらがんばって起きていようとしても、うつらうつら。先生の話が子守唄のように聞こえてきます。

意欲がないわけではありません。ただ、多くの場合、意欲は時間とともに低下していきます。つまり、意欲は長続きしないのです。Bさんの例のように、1コマの授業でもそうですが、もっと長いスパン、たとえば1年という期間でも同じことが言えます。新学年になった時、「今年はがんばるぞ」と意気込んでいる人はとても多いのですが、日を追うごとにその意欲は薄れていき、何となく日々の生活を送っているだけ、そんな人も少なくないでしょう。

③学習性無力感

がんばり屋のCさん。数学はあまり得意ではありませんが、先生の説明を良く聞き、課題もがんばって解いて提出しています。隔週で行われる小テストで良い点を取ろうと、家で多くの問題を解いて勉強しています。それなのに、なぜかテストの点数が良くありません。2回目、3回目とがんばって勉強しているにもかかわらずテストの点数が悪い状態が続きました。Cさんはやる気を失ってしまいました。もうテストで良い点数を取ろうなんて気になりません。期末のテスト。Cさんはまったく意欲を失ってしまいました。Cさんにとって明らかに簡単な問題さえ、解こうとしません。自分には解けないと思い込んでいるようです。

私たちは、がんばっても結果が伴わないことが続くと、簡単なことにさえ意欲を失ってしまいます。これを学習性無力感と言います。

(2) 短期的学習意欲と長期的学習意欲

私は、学習意欲を短期的なものと同期的なものに分けて考えています。もっとも、何時間以下の意欲が短期で、何時間以上が長期というような明確な境界があると考えているわけではありません。相対的に短い時間しか続かない意欲と比較的長く続く意欲の存在を仮定しているだけです。そうすることで、授業運営の工夫を2種類に分けて考えることが可能になります。

教員は、まず学生の短期的意欲を引き出す工夫が必要です。長期的な意欲でなくてよいのです。ただし、1回引き出せばそれで良いというわけではありません。何度も繰り返し引き出してやる必要があるでしょう。そうした工夫を、1回の授業中においても、セメスターを通じて、行うことが大切です。そのような努力によって、学生の意欲が長期的なものになる可能性があります。ただ、先に述べたように、人間の意欲は時間とともに減衰するという性質もありますので、意欲を維持させるような工夫も必要になります。

2. 意欲を引き出す

では、学生の短期的意欲を引き出すためにはどのような工夫が必要でしょうか。

(1) おやっ!?

まず、学生の興味を喚起するような教材を用意することです。興味を喚起するためには、おやっと思わせることが大切です。ここでは興味喚起のための3つのポイントを述べておきましょう。

①新奇性

今まで見たことのない新奇なものは興味を喚起します。そもそも人間は新しい物好きです。新製品が発売されたら（高価なものでなければ）とりあえず買ってみるという人も少なくないのではないのでしょうか。

新奇な対象に興味を向けることは赤ちゃんにおいてもみられる現象です。赤ちゃんの視覚について研究している人は、赤ちゃんのそうした傾向を利用して、赤ちゃんが視覚対象を区別しているかどうかを検討しています。赤ちゃんに同じ刺激を何度も提示して慣れさせた後（これを馴化といいます）、その刺激とはまったく異なる新奇な刺激を提示すると、注視時間が延びるのです（脱馴化）。

授業では、冒頭で学生が見たことのないものを提示して興味を喚起させるような工夫ができれば、効果的な「つかみ」になります。

②認知的葛藤

学生が当然のことだと思っていることとは異なる事実を提示することで、「えっ、本当?」と思わせることも、短期的な意欲を引き出す上で重要なことです。学生の頭の中に、認知的な葛藤状態を作るということです。「自分の常識ではこうだと思

うけれど、それは違うのかな」という感覚です。そのような状態になった時、私たち人間は積極的に情報収集を開始します。何とか認知的葛藤状態を解消しようとするためです。

理科の仮説実験授業（板倉，1965）は、認知的葛藤の喚起を利用した授業運営の代表例と言えるでしょう。仮説実験授業では、実験を行う前にそれぞれの学習者に実験結果についての予想を立てさせます。多くの場合、学習者によって異なる予想が出されます。学習者は、自分の予想と他者の予想が異なると、認知的葛藤状態になり、どちらが正しいのかを考えるために、積極的に情報を集めようとします。実験場面に集中し、実験結果をじっくりと観察します。予想が間違っていた場合には、その理由をしっかりと理解するための学習過程が生じます。非常に学習効果の高い授業手法と言えるでしょう。

③小道具

授業の典型的なスタイルは、教室の中で、教員が学生に対して授業内容を話すというものでしょう。黒板またはスクリーンに情報が提示され、受講者はノートを取ります。資料が配付されることもあります。

そうした授業環境に、なんらかの小道具が登場すると、受講者は「おっ」と反応します。小道具は何でもよいのです。通常、授業環境では登場しないものであれば良いのです。とにかく驚かせることが重要なのです。もちろん、それが授業内容と関連するに越したことはありません。

私がこれまで使ったことがある小道具は、カラーボール、積木、段ボール箱、女の子の人形、洗面器とお湯と水などです。いずれも授業内容に関係する小道具ばかりです。もちろん小道具

具がなくても授業はできるのですが、それらを取り出して提示するだけで、受講者は注目してくれます。ただ、小道具の持ち運びが大変なので、現在はほとんど使用しなくなりました。

(2) わかりそう！

すでに述べたように、理解できることと意欲とは密接な関係があります。したがって、学習者にとっては、これから学ぶ内容がわかりそうだという感覚は、学習に対する大きな動機づけになります。

ほとんどの授業は、基礎的な内容から応用的な内容へ、簡単なことからむずかしいことへと、学習が進むように構成されているはずですが、基礎がしっかりできてはじめて、その上に応用が成り立つわけですが、この展開は、学習者の意欲面においても重要な役割を果たしています。比較的簡単な学習内容を理解することで、次の少しむずかしい内容も「わかりそうだ」という気持ちが持てるからです。次への意欲がわくのです。誰だって、最初からむずかしいことは学びたくありません。いきなり意欲がそがれてしまいます。

ただ、気をつけておきたいのは、教員と学習者とでは知識のレベルが異なりますので、教員にとっては容易なレベルであっても学習者にとってはむずかしいと感じることがあるかもしれないということです。学習者の立場で、学習内容の設定をすることが必要です。

(3) やってみたい！

話を聞いているだけの授業は、情報を受け取るだけの受動的な姿勢になり、そのうち退屈になります。それに対して、自ら

がなんらかの働きかけができる時間が少しでもあると、能動的な態度で意欲的に授業と向き合うことができます。私たちは、基本的に、自分でやってみたいという欲求をもっています。

自分から働きかけのできる授業は、学生の意欲をかき立て、授業への参加意識が高まります。そして、働きかけによってなんらかの変化が生じたり結果が表れたりすると、学生は「自分でやればこう変わるんだ」「自分でやればできるんだ」というような自己効力感を得ることができます。これがさらに意欲を高めます。

典型的な方法かもしれませんが、クイズ形式で進める、質問紙に回答させ自分で集計させる、グループワークをさせるなどは、いずれも学生参加型で、働きかけを重視した有効な方法だと思います。

(4) お得感

「お得」という言葉に弱い人は少なくないでしょう。私たちはお得なものに飛びつきます。お得感は値段が安いことだけから得られる感覚ではありません。同じ値段でも付録やおまけがついているとお得感を感じます。また、限定商品もお得感のようなものを得られます。季節限定、地域限定などと謳われ、何やら希少価値を感じさせるものには、なぜか惹かれ、手に入れたくなってしまおうでしょう。そして手に入れることができたときに、得した気持ちになります。

授業において、学生がお得と感じるものは何でしょうか。○
○学の授業だとしたら、○○学の一般的な知識はどんなテキストにも書いてあります。別にその担当教員の授業に出ることでお得と感じることはないでしょう。むしろ、その教員の授業に

出てお得と感じるのは、他の教員からは聞けない内容、どんなテキストにも書いてない内容を聞けたときだと思います。すなわち、その教員自身の考えや個人的エピソードがお得感をもたらすものと考えられることができます。

授業とはかけ離れた余談は本筋から外れていますが、授業内容に関してその教員がどんな考えをもっているのか、授業内容に関連してその教員がどんな体験談を有しているのかなどは、学生の興味をそそるものであり、学生にとってお得な話になるはずです。そうした内容が授業で語られることにより、学生はその授業に魅力を感じ、学習意欲がわいてくるのではないかと思います。

3. 意欲を維持させる

次に、学生に意欲を維持させるための工夫について考えていきましょう。

(1) 1コマの授業における意欲の維持

90分の授業において、学生の意欲をどのように維持させれば良いのでしょうか。先にも述べましたが、人間の意欲は長続きしません。講義形式で授業をした場合、よほど面白い話の連続でない限り、学生はどうしても飽きてしまいます。そこで私は、授業内容に関連する短い動画（映像資料）をところどころに挿入する方法を採用しています。これは、もともとは授業に飽きさせない、眠らせないことを目的として使用しているのですが、それによって受講生の理解も深まりますし、理解が深ま

ればその結果さらに意欲が増すこともあります。

しかし動画はあくまでも補助、意欲を維持するための手段にすぎません。メインは教員である私の話です。ですから、当該の動画内容について必ず私がきちんと解説します。解説してから動画を見せることもあれば、動画を見せてから（すなわち引きつけてから）解説をすることもあります。いずれにしても、ただ動画を見せて終わり、ということはありません。ましてや、だらだらと1コマじゅう動画を流しっぱなしにすることは決してありません。1つの動画の時間は、通常、短いもので10秒程度、長いものでも数分程度です。

（2）セメスターを通じた意欲の維持

1つの授業はセメスターを通じて続きます。では、セメスターの間、ずっと受講生の学習意欲を維持させるにはどうすればよいのでしょうか。毎回の授業において短期的意欲を引き出す工夫があれば、学生たちはセメスターを通して意欲的に出席してくれます。しかし、中には、教員のそうした工夫にもかかわらず、学習意欲を失っていく学生がいることもまた事実です。

セメスターという長いスパンで学習意欲を考えた時に重要となってくるのが、適切な課題と適切なフィードバックです。宿題、小テスト、レポートなど、セメスター内で何度か学生に課題を与えることがあるでしょう。そして、それを遂行させるでしょう。その際に、学生がどの程度課題を達成できたのか、その後どうすればさらに学習の向上・達成が見込めるのかななどを、学生の状況に応じて適切にフィードバックをすることが重要です。では、学生の意欲を維持するための適切な課題とフィードバックとはどのようなものなのでしょうか。具体的にはどんなこと

に注意すればよいのでしょうか。

まず、学生が確実に達成できる課題を与えることです。学生にとって成功経験は非常に重要です。それを体験させるのです。学生がいくらがんばっても結果が伴わないと学習性無力感に陥ってしまう危険性があります。簡単なことでも達成できればうれしいですし、それによって学生は意欲を維持することができます。自分はやればできるのだという自己効力感も得ることができます。これは学習意欲の維持にとって非常に重要です。

しかし、容易な課題ばかりでは、より大きな達成感を感じることができません。それに成功経験ばかりでは、後に、うまくいかないことが生じた時にすぐに挫折してしまいます。ある程度困難なハードルを用意して、それを乗り越えられる力をつけさせることも重要です。ただ、本人にとってとても乗り越えられないよう課題を与えてはいけません。学生には解けそうにない宿題、とてつもない分量のレポートなどは、それだけで本人が意欲を失ってしまいます。努力によって本人が克服できる、適切なハードルを用意する必要があります。困難に立ち向かってそれを克服した時の達成感を味わわせることが重要でしょう。

容易な課題とやや困難な課題。その組み合わせが大切です。そして課題に対するフィードバックも忘れてはいけません。なお、フィードバックは早めに適切に行うことが重要です。フィードバックが遅れてはいけません。学習心理学の研究では、学習を強化するための刺激は学習の直後に与えないと効果が薄れることが証明されています。

(3) 学生の心を揺さぶる

1 コマの授業においても、セメスターを通じた展開におい

でも、学生の心をなんらかの形で揺さぶることは重要です。人は外界からの刺激を受けて常に心を揺らしながら生きています。刺激の少ない環境は退屈でとても耐えられないという人もきっと多いことでしょう。それは授業でも同じです。教員からの刺激で常に心を揺さぶられていれば、学生の意欲が維持し続けるのではないかと思います。ところで、学生に対する揺さぶりとして、理解の揺さぶりと感情の揺さぶりを考えることができます。

①理解のゆさぶり

意欲を引き出すための1つの手段として認知的葛藤を引き起こすという話をしました。認知的葛藤によって学生の心の中に疑問が生じます。彼らは盛んに情報収集をし、考え、認知的葛藤を解消しようと努力するでしょう。しかし、学生だけでは解消できない場合があるかもしれません。その際には教員が認知的葛藤を解消してやらなければなりません。わかった感を与えることです。

同様に、学生に疑問を投げかけるタイプの授業でも、課題を与える授業でも、「わからない」から「わかった」という理解感の変容が重要になります。

授業の最後に中途半端で終わるのも1つの手です。私自身は1回の授業のまとまりを大切にしているので、このような中途半端で終わるやり方はあまり実行しないのですが、私たち人間の特徴として、完全に終了しない状況ではそのことが妙に記憶に残ることがわかっています。これはツァイガルニク効果と呼ばれている現象です。しかしその不完全さは、翌週必ず解消してやらなければなりません。不完全な理解から完全な理解

への揺さぶりです。このような理解レベルでのゆさぶりを利用して、意欲を維持させてやることも可能でしょう。

②感情の揺さぶり

感情レベルでの揺さぶりを行うためには、さまざまな種類の感情を湧き上がらせるような工夫が必要になってきます。面白い話で単に楽しませればよいというわけではありません。

私は、楽しませたり笑わせたりするだけでなく、感動させることもありますし、授業内容によっては悲しみや怒りに近い感情を喚起させることもあります。授業の冒頭で揺さぶることもあれば、最後に揺さぶることもあります。最後に揺さぶるとそれが学習者の心に余韻として残ります。こうした感情の揺さぶりを継続的に行うことで、学生の授業に対する意欲を短期的にも長期的にも維持することができるのではないかと考えています。

さらに、私たち人間は感情が伴う内容をよく記憶しています。授業で感情を揺さぶられれば、その授業が学生たちの心に残ることになります。私は、自分の授業もそのような形で学生たちの心にずっと残っていてほしいと願っています。

4. しかけとプロフェッショナルリズム

仙台市内の小学校と中学校で、授業参観をさせてもらった時に感じたことがあります。小学校の授業では、先生がとても工夫されていて、授業のところどころに子どもたちを引きつける「しかけ」を用意されていました。それに対して、中学校の授

業で感じたのは、先生方が各教科のプロフェッショナルリズムをお持ちであるということでした。「自分はこの教科のプロである。君たち、私の話を聞きなさい」と言わんばかりの堂々たる授業展開で、生徒はそれに引き込まれているかのように感じました。

では大学生にはどんな授業をすればよいのでしょうか。私は、小学校の授業におけるしかけと中学校の授業における教師のプロフェッショナルリズムの両方が必要ではないかと思っています。大学の授業は、高校までの授業とは異なり、1コマの時間が長いのが特徴です。学生たちは最後まで集中力が持ちません。そこで必要なのがしかけです。ところどころで、しかけを用意し、学生たちを引きつけることが必要になります。第1章や本章で述べてきたほとんどがいわゆるしかけです。しかし、その一方で、学生たちは中学校以上の授業で教師のプロフェッショナルリズムも経験しているはずです。そうした教師の態度も彼らを授業に引き込む大きな要因になるはずです。大学教員は当然その道の専門家でありプロです。そのプロフェッショナルリズムに学生たちは必ず引きつけられるはずです。私たち大学教員は、学生のために、授業でのしかけづくりをしつつ、その学問のプロとして堂々たる授業を展開する必要があるように思います。